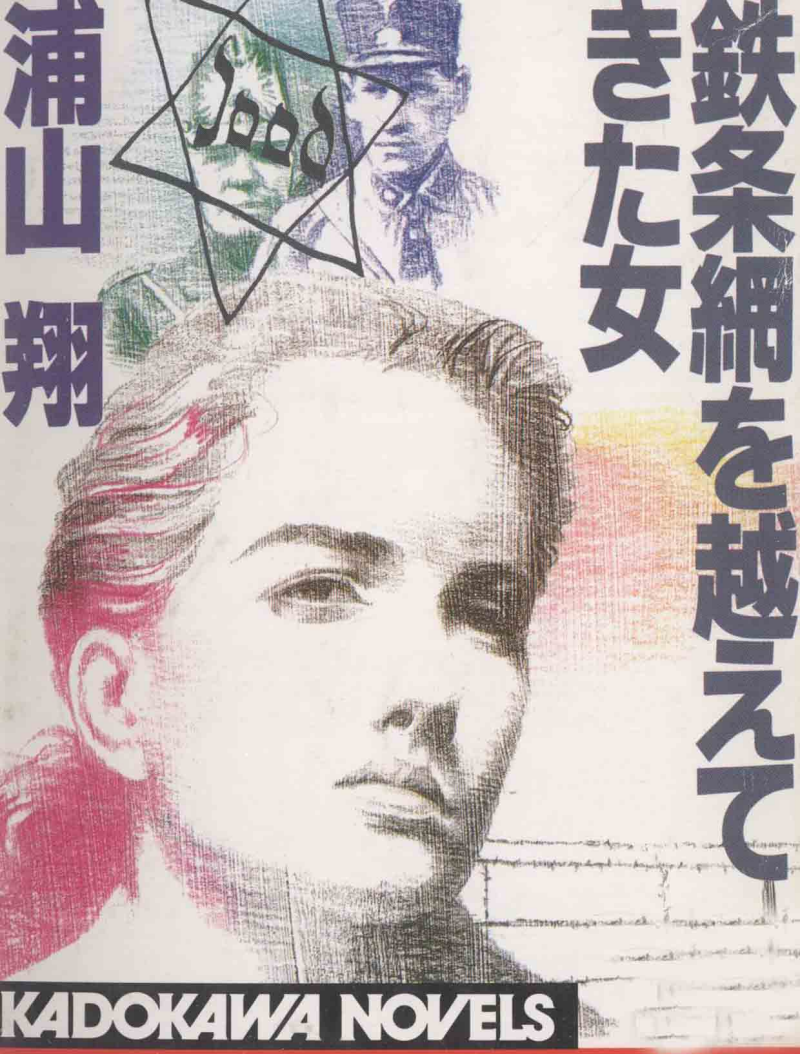
鉄条網を越えてきた女

浦山翔



KADOKAWA NOVELS

100万ドルの遺産、メンゲレ殺人計画書、元ナチSS（エスエス）の変死。国際記者が謎を追

書下し横溝正史賞佳作受賞作!!

カドカワ ノベルズ

昭和六十二年五月十二日初版発行

著　者　浦山翔（うらやましょう）
発行者　角川春樹

鉄条網（てつじょうもう）を越（こ）えてきた女（おんな）

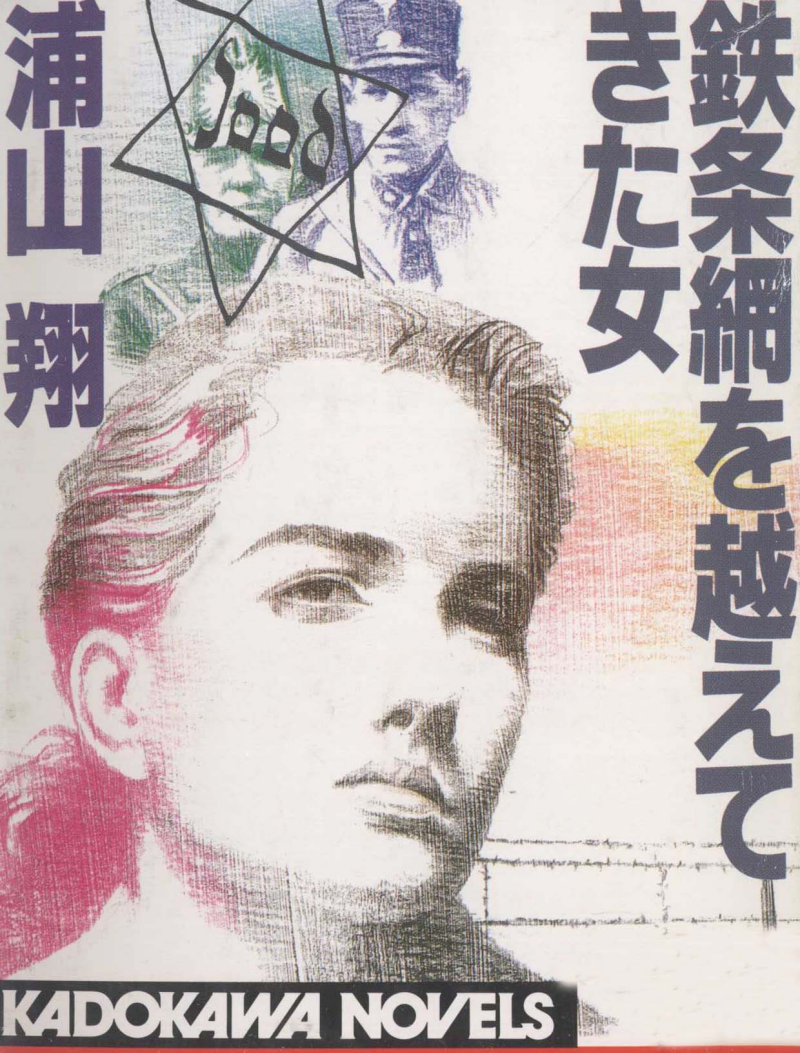
印刷所　旭印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所
装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二一三　振替東京三一九五二〇八
〒一〇二　電話　営業〇三(二三八)八五二一　編集〇三(二三八)八四五一

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-04-780601-3　C0293

鉄条網を越えてきた女

浦山翔



KADOKAWA NOVELS

100万ドルの遺産、メンゲレ殺人計画書、
元ナチSS（エスエス）の変死。国際記者が謎を追う

書下し横溝正史賞佳作受賞作!!

KADOKAWA NOVELS

●作者のことば

父が書き遺した第二次大戦時の日記を読むうち、
ナチスをテーマにした小説を書こうという衝動にかられた。
四百万人が虐殺されたアウシュビッツ。その悲劇の地は、
当時のまま現在も残っている。そこに立った時、体が震えた。
打ち砕かれた人の骨が、四十数年へて、いまも所々に落ちていた。
反ナチズム運動に身を投じた聡明な一人のポーランド女性が忽然と私の頭に浮んだ。

略歴＝一九四二年東京生。中央大学法学部卒。新聞記者として、現在も第一線で活躍中。

定価680円

カドカワ ノベルズ

昭和六十二年五月十二日初版発行

著　者　浦山翔（うらやましょう）
発行者　角川春樹

鉄条網（てつじょうもう）を越（こ）えてきた女（おんな）

印刷所　旭印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所
装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二一三　振替東京一九五二〇八
〒一〇二　電話　営業〇三(二三八)八五二一　編集〇三(二三八)八四五一

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-04-780601-3　C0293

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

鉄条網を越えてきた女

浦山 翔

カバー絵／宇野亜喜良

鉄条網を越えてきた女　目次

第一部
第一章　百万ドルの遺書　14
第二章　日記　24
第三章　コルク・ヘレナ　35
第四章　大使館員　42
第五章　情報活動　50
第六章　フグ極秘計画　59
第七章　水死　66

第八章　リトアニア領事　78
第九章　編集局長　90

第二部

第十章　ポーランドへ　102
第十一章　アウシュビッツ収容所　110
第十二章　手掛り　124
第十三章　シベリア孤児　132
第十四章　名簿　140

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

第十五章　報告書　150
第十六章　友達　160
第十七章　もう一人の脱出者　172
第三部
第十八章　パリの空の下　184
第十九章　ストックホルム　194
第二十章　アテネ　201
第二十一章　遺言状　208

第二十二章　金（きん）の秘密　216
第二十三章　スエズへ　225
第二十四章　カナダ　237
第四部
第二十五章　消えた遺産　244
第二十六章　奪還作戦　250
第二十七章　夜の訪問者　264
第二十八章　小さな命　276

第一部

第一章　百万ドルの遺書

御堂筋は渋滞が続いていた。四車線の一方通行だからすいている時なら、会社から十分足らずでミナミの日航ホテルに着いてしまう。それがやっと本町にさしかかったところだった。

「今日は五・十日やさかい。しかも金曜日ときている。申し訳おまへんな。もう少しかかりそうですわ。インタビューかなにかでっか」

運転手が前を見たまま言った。会社の車だから運転手は清瀬徹準の仕事についてよく知っていた。清瀬は全国日日新聞の記者で、国際ドキュメント班に属していた。

全日新聞は東京と大阪にそれぞれ本社を置き、朝刊と夕刊を合わせた発行部数は一千万部を誇っていた。北海道から沖縄までの主だった都市には、支局や通信部が置かれ、海外にもニューヨーク、ロンドン、パリなどに十五の支局があり、AP、タス、ディリーメール、フランス・ソワールなど特約通信、新聞社は二十を数えた。

「いや、友達の弁護士と約束しているんだ。そうか、今日は五・十の金曜日か……」

「そうですねん。あと十分はかかりますわ……」

友達の弁護士というのは、大学時代のクラスメイトで細川悦造といった。近ごろは会う機会が減ったが、三、四年前まではよく一緒に飲み歩いていたし、細川の情報がきっかけで、大手銀行のロス支店長の使い込み事件をスクープしたこともあった。

細川はこの日の昼過ぎ「ちょっと相談したいことがあるんや」と電話してきた。

「相談って、プライベートなことか」

「ちゃう、ちゃう。ちょっとおもろいネタや」

「ロス支店長よりおもろいやつか」

「いまはどういうことかわからへん。でも奥が深いように思うんや」

清瀬はそれだけ聞くと、すぐに事務所に行くと言った。全日新聞社は梅田にあり、細川の弁護士事務所のある扇町とは、歩いて十分ほどしか離れていない。だが細川は仕事が詰まっていて夜にならないと空かないと言い、午後七時に日航ホテルの喫茶室で待ち合わせることになった。

清瀬は腕時計を見た。間もなく七時になろうとしていた。

「ラジオつけてくれる……」

運転手がスイッチを入れると、ちょうど時報が鳴った。

「今晩は、七時のニュースです。ベイルートの国営放送が伝えたところによると、イスラエル軍機はレバノンのアルラウダ近くのパレスチナ・ゲリラキャンプに対する攻撃を行い、これまでにわかっただけで、二十五人の死亡が確認されました。またこの攻撃で三階建てのビルが破壊され、瓦礫の下に少なくとも八十人が生き埋めになっているとみられます。パレスチナ解放機構（PLO）のスポークスマンは、ただちに声明を発表し〝こうした野蛮な行為に対しては、断固たる反撃を行う〟と語りました」

「また空爆か……」

清瀬がつぶやいた。

「あのへんは、始終戦争でんな。清瀬さんはベイルートへ行ったこと、おますのか」

運転手が聞いた。

「いや、ない。あまり行きたいところではないな」

「そうでっしゃろな。いつ弾が飛んでくるかわからへんもんなあ。やはり日本が一番やろな……」

「そうね。命の心配をしながら仕事するなんて、真っ平だもんな」

清瀬はそう言いながら、社の出張命令ひとつで、いつベイルートの取材に赴くことになるかわからないと思った。多くの日本人にとって戦争は遠い過去の出来事か対岸の火事でしかなかったが、清瀬にとっては、決して遠い国のことではなかった。

銀杏並木に目をやった。明日から九月、まだ秋というには早すぎるのに、冷夏だったせいか銀杏の葉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong